

「分子軌道法」菊池修著（講談社，1971）pp. 12~17.

1-3 LCAO-SCF 方程式

MO ϕ_i をエネルギーの低い順序, $\phi_1, \phi_2, \dots, \phi_n$ に 2 個ずつの電子をスピンを反対向きにしてつめていった, いわゆる閉殻電子構造をもつ $2n$ 個の電子系を問題にする (図 1-1). この $2n$ 電子系の波動関数は(1-9)式で書かれ, その電子エネルギーは(1-23)式となる. 変分法によってこの MO ϕ_i を求めることになるが, MO 法のほとんどの場合において MO ϕ_i は分子を構成している原子の原子軌道 (AO, Atomic Orbital) χ_r の一次結合で近似し,

$$\phi_i = \sum_r c_{ri} \chi_r \quad (1-25)$$

とするので, このときには電子エネルギーが極小になるように LCAO 係数 c_{ri} を求めることになる. 対称性の良い分子では c_{ri} は一義的に定まるものもあるが一般的にはそうではない. そこで MO ϕ_i , すなわち c_{ri} , を変化させながら(1-23)式のエネルギーを極小にすることを試みるわけであるが, その際, MO ϕ_i は規格直交化しているという条件が常に満足されているように ϕ_i を選んでいく必要がある.

$$S_{ij} = \int \phi_i(1) \phi_j(1) d\tau(1) = \delta_{ij} \quad (1-26)$$

ここで δ_{ij} は Kronecker の δ で, $i=j$ のとき $\delta_{ij}=1$, $i \neq j$ のとき $\delta_{ij}=0$ を表わしている. したがって(1-26)式の制限のもとで(1-23)式のエネルギーを極小にする条件を求めるわけであり, これを行なうためにラグランジュの未定乗数法を使う. (1-26)式の S_{ij} に対する未定乗数を $-2\epsilon_{ij}$ と書いて E の代わりに

$$E' = \sum_{i=1}^n 2I_i + \sum_{i,j}^n (2J_{ij} - K_{ij}) - \sum_{i,j}^n 2\epsilon_{ij} S_{ij} \quad (1-27)$$

を極小にする. そのために MO ϕ_i の微小変化 $\delta\phi_i$ に対してエネルギー E' の変化 $\delta E'$ を計算して $\delta E' = 0$ の条件を満たすように ϕ_i を定める手続きをとる.

注) (1-9) は Slater 行列式、(1-23) は以下の式:

$$E = \sum_{i=1}^n 2I_i + \sum_{i,j}^n (2J_{ij} - K_{ij}) \quad (1-23)$$

Lagrange の未定乗数法

$g(x) = 0 \dots (2)$ の条件下で
 $f(x) = y \dots (1)$ の最小(大)を定める方法

次の y' を定める. λ は係数である.

$$y' = f(x) - \lambda g(x)$$

よって $\frac{dy'}{dx} = 0$ から求める.

例) $\phi = \sum c_i \chi_i$

$$\int \phi H \phi d\tau = \sum_i \sum_j c_i c_j H_{ij} = E \quad (H_{ij} = \int \chi_i H \chi_j d\tau) \dots (1)'$$

$$\int \phi \phi d\tau = \sum_i \sum_j c_i c_j S_{ij} = 1 \quad (S_{ij} = \int \chi_i \chi_j d\tau) \dots (2)'$$

規格化条件下で ($\int \phi \phi d\tau = 1$), $E (= \int \phi H \phi d\tau)$ の最小を定める.

$$y' = \sum_i \sum_j c_i c_j H_{ij} - E (\sum_i \sum_j c_i c_j S_{ij} - 1)$$

よって, c_i で微分. (注1)

$$\frac{dy'}{dc_i} = 2 \sum_j c_j H_{ij} - 2E \sum_j c_j S_{ij} = 0$$

$$\therefore \sum_j (H_{ij} - E S_{ij}) c_j = 0$$

$$\text{つまり} \begin{pmatrix} H_{11} - ES_{11} & H_{12} - ES_{12} & \dots \\ H_{21} - ES_{21} & H_{22} - ES_{22} & \dots \\ \vdots & \vdots & \ddots \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \end{pmatrix}$$

つまり $(H - ES) C = 0$. (Hückel 法の式, n 個の変数の解の条件)

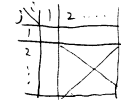
$$(注1) \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n c_i c_j H_{ij} = c_1 \sum_{j=2}^n c_j H_{1j} + \sum_{i=2}^n \sum_{j=2}^n c_i c_j H_{ij} + c_i \sum_{i=2}^n c_i H_{ii} + c_1^2 H_{11}$$

= c_1 で微分すると, $H_{ij} = H_{ji}$ を用いて

$$\sum_{j=2}^n c_j H_{1j} + \sum_{i=2}^n c_i H_{i1} + 2 c_1 H_{11}$$

$$= 2 \sum_{j=1}^n c_j H_{1j}$$

よって c_i で微分すると添字 1 が i になる.



正確には (1-27) は,

$$E' = 2 \sum_i I_i + \sum_{i,j} (2J_{ij} - K_{ij}) - \sum_{i,j} 2\epsilon_{ij} (S_{ij} - \delta_{ij})$$

だから, $\delta_{ij} = 0$ ならば微分して消えるので (1-27) から省かれ.

よって大胆にも ϕ_i で微分する. しかし $\frac{dE'}{d\phi_i}$ と書くのは

よけからあるので 微小変化量と誤解する.

クーロン演算子, 交換演算子とよばれる二つの演算子 J_j, K_j を

$$\left. \begin{aligned} J_j(1)\phi_i(1) &= \int \phi_j(2)\phi_j(2) \left(\frac{1}{r_{12}}\right) d\tau(2)\phi_i(1) \\ K_j(1)\phi_i(1) &= \int \phi_j(2)\phi_i(2) \left(\frac{1}{r_{12}}\right) d\tau(2)\phi_j(1) \end{aligned} \right\} \quad (1-28)$$

と定義し, (1-27)式の各積分値の変化がそれぞれ

$$\left. \begin{aligned} \delta I_i &= 2 \int (\delta\phi_i) H_{\text{core}} \phi_i d\tau \\ \delta S_{ij} &= \int (\delta\phi_i) \phi_j d\tau + \int (\delta\phi_j) \phi_i d\tau \\ \delta J_{ij} &= 2 \int (\delta\phi_i) J_j \phi_i d\tau + 2 \int (\delta\phi_j) J_i \phi_j d\tau \\ \delta K_{ij} &= 2 \int (\delta\phi_i) K_j \phi_i d\tau + 2 \int (\delta\phi_j) K_i \phi_j d\tau \end{aligned} \right\} \quad (1-29)$$

となることを考慮すると $\delta E'$ は次のようになることが導かれる.

$$\delta E' = 4 \sum_i \int (\delta\phi_i) \left[\left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i - \sum_j \varepsilon_{ij} \phi_j \right] d\tau \quad (1-30)$$

この式で $\delta E' = 0$ とおくと MO ϕ_i の満たすべき次の条件式が得られる.

$$\left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i = \sum_j \varepsilon_{ij} \phi_j \quad (1-31)$$

簡単では無いが, (1-28), (1-29) を使って (1-30) が導かれる。
 (1-30)で, 係数(微小) $\delta\phi_i$ に対して恒等的に $\delta E' = 0$
 とするには [] 内がゼロである。しかしこの中では
 未定乗数法の $\frac{dE'}{d\phi_i} = 0$ のことと考えればよい。

この(1-31)式の右辺はMOの和で表わされているが, $\varepsilon_{ij} = \delta_{ij} \varepsilon_i$ と置き換えても良い。これはエネルギー極小条件を求める際に導入された乗数 ε_{ij} がエルミット行列をつくっていて, この行列 ε はユニタリー変換によって対角化されるということと, (1-31)式の他の量もユニタリー変換を受けた後も(1-31)式と同じ関係式を満足することが証明できることによる。したがって(1-31)式は次のように書き換えられる.

$$\left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i = \varepsilon_i \phi_i \quad (1-32)$$

ε_i はMO ϕ_i に特有な量と考えることができ, MO ϕ_i のMOエネルギーとよぶ。この量は分子から電子を一個取り除くときのイオン化エネルギーと密接な関係にあって, MO ϕ_i を占める電子のイオン化エネルギーはMOエネルギー ε_i の符号を変えた値に等しい (Koopmans の定理)。

2n 電子系のエネルギー(1-23)式はMOエネルギー ε_i を使って表わすことができることを示しておこう。(1-32)式の両辺に左から ϕ_i を乗じて積分すると

$$\begin{aligned} \varepsilon_i &= \int \phi_i \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i d\tau \\ &= I_i + \sum_j (2J_{ij} - K_{ij}) \end{aligned} \quad (1-33)$$

ここで定義したおいて,

$I_i = \int \phi_i(1) H_{\text{core}}(1) \phi_i(1) d\tau(1)$	"コア積分"
$J_{ij} = \int \phi_i(1) \phi_i(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_j(2) d\tau(1,2)$	"クーロン積分"
$K_{ij} = \int \phi_i(1) \phi_j(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_i(2) d\tau(1,2)$	"交換積分"

(1-33)の導出は,

$$\int \phi_i \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i d\tau = \varepsilon_i \int \phi_i \phi_i d\tau = \varepsilon_i$$

$$\int \phi_i H_{\text{core}} \phi_i d\tau = I_i$$

$$\int \phi_i \sum_j J_j \phi_i d\tau = \int \phi_i(1) \sum_j \left(\int \phi_j(2) \phi_j(2) \frac{1}{r_{12}} d\tau(2) \right) \phi_i(1) d\tau(1) = \sum_j J_{ij}$$

$$\int \phi_i \sum_j K_j \phi_i d\tau = \int \phi_i(1) \sum_j \left(\int \phi_j(2) \phi_i(2) \frac{1}{r_{12}} d\tau(2) \right) \phi_j(1) d\tau(1) = \sum_j K_{ij}$$

$\therefore \varepsilon_i = I_i + \sum_j (2J_{ij} - K_{ij})$

したがって(1-23)式は次のようになる.

$$E = \sum_{i=1}^{2n} (I_i + \varepsilon_i) \quad (1-34)$$

こうして導かれた(1-32)はまさに Hückel 法の $H\phi = \varepsilon\phi$ と同じ形になった。Hückel 法の $(H - \varepsilon S)C_i = 0$ に対応して $(F - \varepsilon S)C_i = 0$ (1-46) は H を F に替えたものになる。以下 2ページは (1-46) 導出のための数学である。

さてMOをLCAO近似で表わした場合の係数 c_{ri} の満たす条件も(1-30)式に(1-25)式を代入して $\delta E' = 0$ とすれば得られる。まず(1-25)式を行列の形で書いておこう。

$$\phi_i = (\chi_1 \chi_2 \cdots \chi_m) \begin{pmatrix} c_{1i} \\ c_{2i} \\ \vdots \\ c_{mi} \end{pmatrix} \quad (1-35)$$

これを単に次のように書く。

$$\phi_i = \chi c_i \quad (1-36)$$

n 個の MO ϕ_i に対して(1-36)式と同様の式を書くことができるが、それらはまとめて次のように書けることは簡単に確かめられる。

$$(\phi_1 \phi_2 \cdots \phi_n) = (\chi_1 \chi_2 \cdots \chi_m) \begin{pmatrix} c_{11} & c_{12} & \cdots & c_{1n} \\ c_{21} & c_{22} & \cdots & c_{2n} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ c_{m1} & c_{m2} & \cdots & c_{mn} \end{pmatrix} \quad (1-37)$$

これを次のように書く。

$$\phi = \chi C \quad (1-38)$$

(1-38)式の ϕ と C の関係を用いて(1-30)式を書き換えるが、そのために演算子に対して AO χ によって計算される行列を定義しておくことと便利である。たとえば H_{core} を AO χ_r, χ_s ではさんで積分した

$$H_{rs} = \int \chi_r H_{\text{core}} \chi_s d\tau \quad (1-39)$$

を行列要素とする行列を H としよう。

$$H = \begin{pmatrix} H_{11} & H_{12} & \cdots & H_{1m} \\ H_{21} & H_{22} & \cdots & H_{2m} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ H_{m1} & H_{m2} & \cdots & H_{mm} \end{pmatrix} \quad (1-40)$$

そうすると MO に関する積分 I_i は次のように書くことができる。

$$\begin{aligned} I_i &= \int \phi_i H_{\text{core}} \phi_i d\tau = \int (\sum_r c_{ri} \chi_r) H_{\text{core}} (\sum_s c_{si} \chi_s) d\tau \\ &= \sum_{r,s} c_{ri} c_{si} H_{rs} = \mathbf{c}_i^\dagger \mathbf{H} \mathbf{c}_i \end{aligned} \quad (1-41)$$

ここで $\mathbf{c}_i^\dagger = (c_{1i}, c_{2i}, \cdots, c_{mi})$ である。この式を使うと MO ϕ_i の微小変化 $\delta\phi_i$ を \mathbf{c}_i の変化でかくことができる。すなわち

$$\int (\delta\phi_i) H_{\text{core}} \phi_i d\tau = (\delta\mathbf{c}_i^\dagger) \mathbf{H} \mathbf{c}_i \quad (1-42)$$

(1-30)式の他の演算子についても同じように取り扱うことができ、 ϕ_i の変化を \mathbf{c}_i の変化で表わすことができる。そこでそれらの式を(1-30)式に代入すると次式が得られる。

$$\delta E' = 4 \sum_i (\delta\mathbf{c}_i^\dagger) (\mathbf{F} \mathbf{c}_i - \sum_j \mathbf{S} c_j \epsilon_{ij}) \quad (1-43)$$

ここで行列 \mathbf{F} と \mathbf{S} は次のような行列要素をもっている行列である。

$$\left. \begin{aligned} F_{rs} &= \int \chi_r \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \chi_s d\tau \\ S_{rs} &= \int \chi_r \chi_s d\tau \end{aligned} \right\} \quad (1-44)$$

$\delta E' = 0$ の成立する条件式は(1-43)式より

$$\mathbf{F} \mathbf{c}_i - \sum_j \mathbf{S} c_j \epsilon_{ij} = 0 \quad (i=1, 2, \cdots, n) \quad (1-45)$$

前と同じように $\epsilon_{ij} = \delta_{ij} \epsilon_i$ とおくことができるので

$$(\mathbf{F} - \epsilon_i \mathbf{S}) \mathbf{c}_i = 0 \quad (i=1, 2, \cdots, n) \quad (1-46)$$

この式が Roothaan によって導かれた Hartree-Fock の式である。行列 \mathbf{F} は(1-44)式で与えられているが、MO を LCAO で展開して AO だけに関する式に直すと次のようになる。

$$F_{rs} = H_{rs} + \sum_{j,t,u} c_{ij} c_{uj} [2(rs|tu) - (rt|su)] \quad (1-47)$$

ただし

$$(rs|tu) = \int \chi_r(1) \chi_s(1) \left(\frac{1}{r_{12}} \right) \chi_t(2) \chi_u(2) d\tau(1,2) \quad (1-48)$$

行列を書き換える (1-47) に注意することです。

$$\begin{aligned} I_i &= \int \phi_i H_{\text{core}} \phi_i d\tau \\ &= \int \sum_r c_{ri} \chi_r H_{\text{core}} \sum_s c_{si} \chi_s d\tau \\ &= \sum_{r,s} c_{ri} c_{si} (r|H|s) = \sum_{r,s} c_{ri} c_{si} H_{rs} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} J_{ij} &= \int \phi_i(1) \phi_i(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_j(2) d\tau \\ &= \int \sum_r c_{ri} \chi_r(1) \sum_s c_{si} \chi_s(1) \frac{1}{r_{12}} \sum_t c_{tj} \chi_t(2) \sum_u c_{uj} \chi_u(2) d\tau \\ &= \sum_{rstu} c_{ri} c_{si} c_{tj} c_{uj} (rs|tu) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} K_{ij} &= \int \phi_i(1) \phi_j(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_i(2) d\tau \\ &= \int \sum_r C_{ri} \chi_r(1) \sum_s C_{sj} \chi_s(1) \frac{1}{r_{12}} \sum_t C_{tj} \chi_t(2) \sum_u C_{ui} \chi_u(2) d\tau \\ &= \sum_{rstu} C_{ri} C_{sj} C_{tj} C_{ui} \langle rs | tu \rangle \\ &= \sum_{rstu} C_{ri} C_{si} C_{tj} C_{uj} \langle ru | ts \rangle \end{aligned}$$

(1-33)から

$$\begin{aligned} \varepsilon_i &= I_i + \sum_j (2J_{ij} - K_{ij}) \\ &= \sum_{rs} C_{ri} C_{si} H_{rs} + \sum_{jrstu} C_{ri} C_{si} C_{tj} C_{uj} [2 \langle rs | tu \rangle - \langle ru | ts \rangle] \\ &\text{C}_{ri} \text{C}_{si} \text{を} \text{外に} \llcorner \text{出した残り} \text{が} F \text{の} rs \text{成分} \text{の} \text{で} \text{ [(1-41)を参照].} \\ F_{rs} &= H_{rs} + \sum_{jtu} C_{tj} C_{uj} [2 \langle rs | tu \rangle - \langle ru | ts \rangle] \end{aligned}$$

変分法によって得られた方程式(1-46)式を解くことにより最良のMOを得ることができることがわかったが、この式を具体的に書いてみると次のようになる。

$$\left. \begin{aligned} (F_{11} - S_{11}\varepsilon_i)C_{1i} + (F_{12} - S_{12}\varepsilon_i)C_{2i} + \dots + (F_{1m} - S_{1m}\varepsilon_i)C_{mi} &= 0 \\ (F_{21} - S_{21}\varepsilon_i)C_{1i} + (F_{22} - S_{22}\varepsilon_i)C_{2i} + \dots + (F_{2m} - S_{2m}\varepsilon_i)C_{mi} &= 0 \\ \dots & \\ (F_{m1} - S_{m1}\varepsilon_i)C_{1i} + (F_{m2} - S_{m2}\varepsilon_i)C_{2i} + \dots + (F_{mm} - S_{mm}\varepsilon_i)C_{mi} &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (1-49)$$

Hückel法では
 $(H - \varepsilon_i S)C_i = 0$
 $S = I$ (単位行列)として
 $HC = C\lambda$
 $C^{-1}HC = \lambda$
 つぎ、Hを対角化するためHの要素は確定済み

PPP法, CNDO (INDO, MNDO)法などでは
 $(F - \varepsilon_i S)C_i = 0$
 しかしSは必ずしもIとはおかない。
 $FC = SC\lambda$
 $C^{-1}(S^{-1}F)C = \lambda$
 2はS⁻¹Fを対角化すればいいかというところが無い。
 求めるべきCはFock行列成分F_{rs}の中に入っているから(式1-47), SCF計算が必要になる。

$$\left. \begin{aligned} (F_{11} - \varepsilon_i S_{11}) &C_{1i} + (F_{12} - \varepsilon_i S_{12}) C_{2i} + \dots \\ (F_{21} - \varepsilon_i S_{21}) &C_{1i} + \dots \\ &\vdots \end{aligned} \right\} = 0$$

Cが入っている。行列要素が未確定。

この連立方程式を解いてε_iとc_{ri}を求めるためにはまず次の永年方程式を解いてε_iをきめ、次に各ε_iに対するc_{ri}の組を求める手続きをとる必要がある。

$$\begin{vmatrix} F_{11} - S_{11}\varepsilon & F_{12} - S_{12}\varepsilon & \dots & F_{1m} - S_{1m}\varepsilon \\ F_{21} - S_{21}\varepsilon & F_{22} - S_{22}\varepsilon & \dots & F_{2m} - S_{2m}\varepsilon \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ F_{m1} - S_{m1}\varepsilon & F_{m2} - S_{m2}\varepsilon & \dots & F_{mm} - S_{mm}\varepsilon \end{vmatrix} = 0 \quad (1-50)$$

(1-50)式を解くためには行列要素F_{rs}を計算しておくことが必要であるが、(1-47)式からもわかるようにF_{rs}はすでに係数c_iがわかっていると計算できない。しかしc_iは(1-50)式より得られるε_iの値がわかっている(1-49)式から計算できる値なのである。この問題を解決するためにくり返しによってSelf-Consistentな結果を得る手法を用いる。それは、まず最初に何らかの方法でc_iの組を仮定する。次にそのc_iを使ってF行列を計算し、(1-50)式を解いてε_iを求める。そのε_iの値を用いてc_iの値を新たに(1-49)式より求める。この手続きをくり返していき、c_i, ε_iの値がくり返し計算においてもはや変化しなくなるまでくり返す。この手法をSCF (Self-Consistent Field) 法という。なお(1-50)式を解くためには必要な他の積分はAOを具体的に仮定して計算すればよい。π電子系におけるLCAO-SCF法(Pariser-Parr-Pople法など)や原子価電子に対するLCAO-SCF法(たとえばCNDO法)はこの手法に基づくもので(1-46)式を解いて解を得る。

行列F, (1-46)式, を計算する際に(1-47)式に対して微分重なりを無視する(Neglect of Differential Overlap) 近似が使われることがある。この近似はAOに関する積分, ⟨rs|tu⟩がr=sおよびt=uの積分以外は0とする近似である。この近似を使うと行列要素F_{rs}は次のように簡単になる。

$$\left. \begin{aligned} F_{rr} &= H_{rr} + \frac{1}{2} P_{rr} \langle rr | rr \rangle + \sum_{i \neq r} P_{ii} \langle rr | ii \rangle \\ F_{rs} &= H_{rs} - \frac{1}{2} P_{rs} \langle rr | ss \rangle \quad (r \neq s) \end{aligned} \right\} \quad (1-51)$$

ただしP_{rs}は結合次数といわれる。

$$P_{rs} = 2 \sum_j^n C_{rj} C_{sj} \quad (1-52)$$